「近代思想」における大杉栄の批評の実践性について

村田裕和

はじめに

本稿は大杉栄・荒畑寒村によって創刊された「近代思想」（第一次、大正元年十月～大正三年九月）における批評活動が、いかなる歴史的過程の中で実践的に獲得・形成されたのかを考察する。大逆事件、大正改元とそれに伴う一連の事態の進行の中で、大杉らは乃木夫妻の殉死という出来事に矛盾の集中的な表れを感知した。こうした事態への批判は、近代思想社小集という集まりによる直接的な文壇への介入を伴った。この小集は明治期社会主義運動が実践してきた講演会・集会という思想伝達の形式を継承するものである。第二章では大逆事件以前の活動の中断地点を確認し、第三章では「近代思想」以後への接続を考察する。

一　「近代思想」創刊と乃木殉死

大正元年十一月二十日、大杉栄は予防検束を受け半日間留置された。「近代思想」第一巻第三号（大正元年十二月）の「大久保より」（栄）にその報告がある。近所に用足しに出かけた大杉は、停車場付近の人だかりに「今日はミカドのお帰り遊ばす日」だと思うや否や、二人の尾行に「署長の命令」によって捕えられる。この日、天皇は十五日から川越一帯で行われていた陸軍特別大演習を統監しての帰路であった。すでに十二日には「大元帥陛下御践祚最初の御親閲」（『東京日日新聞』十三日）である大観艦式を横浜港で行っており、つづいて将兵十万を北軍と南軍に分って催された大演習もまた、新たな「大元帥陛下」を印象づけるきわめて重要度の高い行事であった。

演習は川越中学校に大本営を置き、十九日まで行われた。位階や金品の下賜があって、天皇が帰京したのがちょうど二十日。この日は午前九時二十分に川越停車場を発ち、十一時五分に新宿駅に着いた。ここから青山離宮まで馬車（鳳輦）である。近代思想社は、府下豊多摩郡大久保百人町つまり新宿駅の北隣である。大杉が用を足しに出かけたのは「ミカド」の到着する前の新宿停車場近辺だったのであろう。さらに、翌月八日には荒畑寒村も同様の予防検束を受けている。明治天皇の死から数ヶ月、権力の交代はつつがなく進行していたのである。

「近代思想」創刊号（大正元年十月）の「発刊事情」（栄）によれば、大杉が大逆事件以後をにらんで「止むを得ずんば文芸雑誌でも出して見やうか」と計画したのは一年以上前のことである。しかし状況はそれをも許さず、ようやく明治四十五年七月に荒畑と計画を開始し、創刊を九月と決定したとある。この偶然の日程は、「近代思想」という存在にある必然性を与えることになる。右の「発刊事情」によれば、政治的闘争を一端回避するという消極的側面が一面にあったことは事実のようである。しかし創刊を九月に決定し、準備を開始したところで天皇が死去し

「諒闇」となる。これによって創刊が伸びて九月十日が原稿締め切り日となって、さらにその三日後の大喪当日に乃木夫妻の殉死が起こる。崩御・大喪・殉死・大演習と続く一連の事態は、大杉らにとって、新たに始める雑誌の性格を決定づけた。たとえば「近代思想」第一巻第三号の「座談」（※）に、日本が「レアクションの時代」と位置づけられており、同じ文章で内田魯庵の「気まぐれ日記」（「太陽」連載、大正元年十一月掲載分）についてコメントしている。魯庵は殉死に触れて、乃木の思想そのものよりも思想を貫く「誠実真摯」な態度を賞賛し、最近の変節甚だしい「新思想家」を引き合いに出す。これは大逆事件以後の反動化の中、多くの社会主義者が沈黙・転向した事実を念頭に置く発言である。魯庵はさらに、乃木の死を武士道で解釈することはせず、その直観的な「感情」に「権威」を置いている。「誠実真摯」に触れた日本人なら「其の自刃を耳にした瞬間に必ず胸に響いたものがあらう」という刹那の「感動」は、後述するように坪内逍遥が「理知」を超越した「趣味性」と呼んだ道徳的・倫理的判断と同一である。これらは学習・慣習化されたイデオロギー的条件反射の要求といってよく、まさに身体に刻みこまれた主体的な「感情」の自然な発露であることの要請なのである。

この時期、同じ号の新刊紹介欄で荒畑寒村言うところの「幾百と知れぬ乃木大将論」が噴出したが、魯庵が「先帝陛下の御一代記は将軍の自殺を以て画龍点睛の妙を極めてをる。先帝の偉大は将軍の死に由て益々偉大を加へられた感がある」（「気まぐれ日記」）と言うように、乃木の死は明治天皇の大喪という一大イベントの最後の見せ場として演出され、物語化されていく。教育家・道徳家は能弁となり、新聞・雑誌は紙面をこれに占拠された。全国各地で「追悼会」が開かれ、殉死の精神にならう姿勢をみずから表明する者が幾百と追随する。比較的初期に書かれた島田三郎「俗論的批判を許さず」（「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」九月十七日）は、問題の核心に触れている。

> 時勢に対する慷慨の情と先帝の恩寵に対する至誠とに出でたりとなすもの恐らく真相に近いものと感ぜられる。〔中略〕蓋し大将の生涯は至剛至直至誠を一貫したる生涯であつて俗論的道徳批判を加ふるを許さぬ、大将の死は一千有余年来涵養せられたる日本武士道の最期の華で一ありて二あるべからざる人間の精神の霊動である

乃木の死は、論理ではなく、天皇に忠実であるという一貫性によって支えられたものであって、島田は模倣殉死を戒めつつ、「武人命を軽ずること鴻毛の如してふ生きたる範を永世に垂れ得たりとせば実に大将の本懐とする所であらう」と解釈する。乃木の死とそれをめぐる言説は、天皇の死というものが死を以てその恩に報いるべき程の出来事であるという意味を与え、その天皇に仕える臣民がいかに恩寵に浴しているかを〈乃木〉という表象によって可視化させたのである。したがってここでは、武士道という〈道〉の具象化であるよりも、より根源的なところでは批評の排除と二者択一の強制が行われた。天皇の死に参加するという具体的方法を示した乃木の完全なる「人格」は、明治天皇との甘美なる抱擁にみずからも参加する身ぶりを教えたのである。

乃木殉死のこの実践的道徳的性質が、「近代思想」の積極性・必然性を規定した。それは現在進行中の歴史的過程の中で、単なる実行の回避ではなく、批評の必然性を獲得していくことである。「座談」と同じ第三号の巻頭言「法律と道徳」（※）は、雑誌の批判的性格がいかなるものであるべきかを明らかにしている。大杉は言う。「法律は人を呼んで国民と云ふ。道徳は人を指して臣下と云ふ」。大杉によれば道徳とは

「臣下」という呼称や、罪意識ないし排除意識、衣服、納税、性と知の複合的な階級化や排除などであり、それらは日常において権力関係を支える意識の具体的な現れのことであった。要約すると次のような論点が表現されているといえよう。

①主体的に法律を率先し、それを越え出ようとする意識である。
②日常的に、不断に働く。
③臣下、罪人、女性のように、不均等な二項対立の下位を再生産する。
④呼称や衣服など日常生活の具体物に現れる。

こうした意識の編成に向けた批判が「近代思想」全号を貫くことになる。先に「社会主義者が沈黙・転向した事実」と書いた。創刊号の「消息」欄にはかつての活動家たちの近況が記されているが、「平民新聞」創刊時からの同志である西川光次郎は「松村介石の道の会」に、また木下尚江は「岡田某」の「万能腹式呼吸の秘法」に入っているとある。前者はキリスト教者であり、岡田某は岡田式呼吸静坐法の岡田虎二郎である。大逆事件以後の同志の四散と生活の窮乏や思想転向など、「近代思想」の当面する困難の一つは旧同志の再組織化と新たな人脈の構築であった。

こうした中、かつて「大阪平民新聞」を金銭的に支援した大阪の時計商岩出金次郎は、いち早く「近代思想」に協力した旧同志の一人である。岩出は白雨と号し、刑死した森近運平と特に親しい間柄であった。「近代思想」第三号に「帳場の蔭より」と題する歌三首がある。

三年ぶりふと見たくなり国禁の、書を取出しぬ書棚のすみより。
乃木の死をたゝへて泣きしその日より、牧水といふ詩人きらひになりぬ。
たそがれの書斎のすみの刑死せし、友の写し絵がふと目にうつれり。

石川啄木の調子を模倣した歌風である。ここで歌の巧拙は問わないが、この三首は白雨の意識において大逆事件から乃木の殉死へという経過が、けして無関係の二つの出来事ではないことを物語っている。「国禁の書」とあるが、三年前は明治四十二年であるから、その当時発禁を受けたものの中で最も考えられるのは、明治四十二年一月三十日発行の『麺麭の略取』である。同書は発禁に備えて、発行日に先行して同志に発送されているからである。三首目の「友」は森近であろう。白雨自身は、遅くとも大正元年には「特別要視察人」としてその言動を監視されており、「国禁」や「刑死」といった言葉は自身も大逆事件の際検挙された白雨にとって、切実なものとして発せられている。一首目と三首目の懐古的な調子は、二首目によって現実の作歌する時間へと結ばれている。

若山牧水が乃木を讃えたというのは、「詩歌」第二巻第十一号（大正元年十一月）にある「空想者の手紙」であろう。これは末尾に「十月十三日郷里にて」と記された書簡体エッセイで、当時牧水は父の危篤のため帰郷しており、翌月十四日、一端持ちなおしていた父の急死を迎えている。「空想者の手紙」はその間の日常をつづっている。

二重橋の前の土に坐つて御平癒を祈つて居る人々の写真を入れた新聞を、どうしても疎末に出来ず、わざ〳〵丁寧に切り抜いて壁に張つたり、いろくの姿の乃木大将の写真を切抜いて張つたり、それらの記事を見て憚りもなく眼を熱くして泣いたりしたのもこの部屋である。雑誌に載つて来る作物の巧拙もこの部屋に於ては実に明瞭に

わかる気持がする。

ここには「たゝへて」という白雨の歌の言葉はなく、牧水の涙は危篤の父が何らかの影響を及ぼしているのかも知れない。全集等では「二重橋の」以下全文が削除されており、牧水の心境自身に大きな幅があるのであろう。第五歌集『死か芸術か』（東雲堂、大正元年九月二三日）の序文には「明治大帝御葬儀の話、乃木将軍殉死の噂も何だかよその世界に起つたことのやうに遠く〳〵耳に響く。実際この村に於てはそれらの事よりこの雨で栗が何升余計に拾へたこと、積んでおいた材木が何本流れたことの方が遥かに重大な事件であるのだ」（擱筆九月十八日）と、ナショナリズムの昂揚を生活者の立場から相対化してみせたのだが、この九月から翌年三月頃までの歌を収めた第六歌集『みなかみ』（籾山書店、大正二年九月十日）には、「十一月三日、今年はすでに天長節の日にあらず、悲しみてうたへる歌三首」として以下のような三首が含まれていた。

曇りなき十一月三日の空の日のかなしいかなや静かに照れる
かしこしやこの一もとの菊にさへ大御心ののこれるごとき
野に生ふる草山にそびゆる樹のごときこのこころもて悲しみまつる

九月十八日の『死か芸術か』序文、十月十三日「空想者の手紙」、十一月三日の歌、十四日の父の死とつづく郷里の時間は、「近代思想」第四号に載った「太陽の光線」（若山牧水）のような破調の歌とも詩ともつかぬ言葉が詠まれた時期でもある。

白雨の歌の「きらひになりぬ」という言葉が、それまで牧水には共感を抱いていたことを示しているとすれば、牧水に対する嫌悪は、白雨自身のある親密な部分が牧水の行為によって衝撃を受けたことを裏書きしている。それは、寒村の言葉を借りれば「悲哀と、自棄と、絶望との情緒は、亦この集『死か芸術か』をも一貫し然もそれが一層沈静な、淡いユーモアを含んだアートを以て表現されて居る」（「近代思想」第三号、「新刊紹介」）という牧水の歌が、天皇や乃木への哀悼によって自己の感情を奉納してしまったことの衝撃であった。白雨が「国禁の書」と「友の写し絵」を呼び起こしたのは、彼らを死に追いやった力が、止むことなく益々深く、牧水のような歌人にさえ進行していることを感知したからに他ならない。

白雨の名は、『特別要視察人状勢一斑　第四』には「各種事情ヨリ観察シテ特ニ注意ヲ要スト認メラルルモノ」の一人として挙げられていて、「桃山御陵ニ参拝スルモノ激増シタル由ナルモ僕等ハ先祖ノ墓ニサヘ参拝シタルコトナキモノナレハ況ヤ何ノ因縁モナキ人ノ墓参杯トハ全ク感心セルコトニアラスヤ云々」という発言が記録されている。さらに大正三年四月十一日の昭憲皇太后の死に際して彼は「別ニ悲ムヘキコトモ無ク又喜フヘキ因縁モ」無く、「老人ノ死ハ固ヨリ免レ難キモノナルヲ以テ早ク片附タルハ寧ロ結構ナリ云々」とも発言している（附「特別要視察人近況概要」）。天皇の死、乃木の死、そして皇太后の死が白雨の感情を冷ますのは、そこに参加をすることが、〈大逆〉事件の無意識の承認であることを知りぬいていたからにほかならない。

二　運動の断絶と継承

明治四十年、森近運平や岩出白雨らによって「大阪平民新聞」が発行されていた時期、直接行動派と議会政策派の分裂が決定的なものとなっていく一方で、堺利彦や幸徳秋水らは、中国やインドの革命家と接触を深めていた。

「大阪平民新聞」は明治四十年六月一日から翌年五月五日まで、月二回、全二十三号を発行し、五月二十日に号外を出して廃刊を告知したほか、附録として「労働者」を四度刊行している（分派問題により第十一号から「日本平民新聞」と改題）。廃刊は、一周年を期しての東京移転計画が妨害されたことが直接原因である。様々な形での継続的な弾圧の効果が、経営上の財政的な逼迫となり、経営者や同志の身体的消耗となって発現していたのである。結果的に大逆事件への道のりとなった幸徳秋水の一時帰郷の主要な目的も、静養のためとされている。

こうした囲い込みは、堺・幸徳らのグループに向けて狭められ、次第に大逆事件へと焦点が合わされた。これらによって生じた「近代思想」創刊までのほぼ四年間の運動の空白は、必然的に「大阪平民新聞」を開かれたままの傷口として残すこととなった。それは理論的継承もさることながら、特に同志との連絡と再結合という具体的課題に関わっているのである。明治四十年、四十一年当時の堺・幸徳グループ（金曜講演会グループ）と、在日中国人のうち非孫文系列のグループは、それぞれが持つ研究会に参加し合うなど盛んに交流していた（表①）。中でも中心的な役割を果たしたのは、張継と劉師培である。張継は明治四十年六月頃に社会主義研究会を結成し、八月三十一日には幸徳秋水を招いて第一回社会主義講習会を行い、以降堺や大杉を招いている。また劉師培は妻の何震を助けて雑誌「天義」を出版していた。張継のアナキストとしての活動は嵯峨隆によって次のように指摘されている。

張継は後年にいたって権力に接近して右派政治家の道を歩むとは言え、中国で最も早くからアナキズムを唱えた人物の一人である。そして、東京とパリで中国で最初のアナキスト団体（東京「天義」、パリ「新紀元」）が結成されると、その二つの団体に関わることができた唯一の人物でもある。しかし意外なことに、彼はアナキストの陣営に所属しながらも、アナキズムを時局との関連で論じることは殆どなかった。むしろアナキストとしての彼は、外国のアナキズム文献の翻訳者、そして社会主義講習会や亜洲和親会などにおける活動家としての印象を与える。（坂井洋史・嵯峨隆編『原典　中国アナキズム資料集成』別冊、緑蔭書房、一九九四年）

張継自身の回想『張溥泉先生回憶録・日記』（文海出版、一九八五年）では、秋水訳の二つの文章を中国語に重訳したと記されていて、マラテスタの『無政府主義』と、某氏の『総同盟罷工』とある。前者は実際には白柳秀湖訳「無政府主義」（未刊行）の重訳であり、後者は明治四十年十二月頃『経済組織の未来』と題して秘密出版された秋水訳、アーノルド・ローレル著の『総同盟罷工』である。秋水自身も「日本平民新聞」にマラテスタ「無政府主義と新労働組合」の翻訳を載せているが、マラテスタはイタリアのアナキストで、この年八月二十四日から三十一日までアムステルダムで開かれた第一回国際アナキスト大会にも出席し、ロンドン設置の事務局員に選出されている。なお、秋水は同会「紀要」第一号（一九〇八年一月）および第六号（一九〇八年一〇月）に日本についての報告を掲載している（西川正雄『初期社会主義運動と万国社会党』（未来社、一九八五年））。こうした日中の理論的研究の接近が意味するのは、究極的には、日本の帝国主義化がまったく異なる運動の経緯や思想背景を負う者たちに共通言語の必要を認識させたからに他ならない。それは意志疎通のための言語から、現実に対する認識と実践のための理論までを含む。

そもそも大杉と張継とは、講演会と同時に、大杉がエスペラント語を教授する関係でもあった。張継は民報社（中国同盟会機関誌「民報」発行

表①　金曜講演会・社会主義講習会その他の集会（明治40～41年）

月・日	集　会　名	回	備　　考
6・1	「大阪平民新聞」		創刊
10	「天義」		創刊（何震・劉師培）
8・1	夏期講習会		～10日、田添・幸徳・堺・山川・片山・西川
18	万国社会党大会		～24日、シュトゥットガルト大会
25	万国無政府党大会		～30日、アムステルダム大会
31	社会主義講習会	①	幸徳講演
9・6	金曜講演	1	
13	金曜講演	2	
15	社会主義講習会	②	堺講演
20	金曜講演	3	
22	社会主義講習会	③	
10・4	金曜講演	4	
6	社会主義講習会	④	山川講演
11	金曜講演	5	
18	金曜講演	6	幸徳送別会
25	金曜講演	7	
11・1	金曜講演	8	
5	「日本平民新聞」		「大阪平民新聞」改題（分派決定的）
8	金曜講演	9	
10	社会主義講習会	⑤	大杉講演
15	金曜講演	10	大杉出獄歓迎
22	金曜講演	11	
24	社会主義講習会	⑥	大杉講演
29	金曜講演	12	荒畑、白柳入営送別
12・6	金曜講演	13	
8	社会主義講習会	⑦	山川講演
13	金曜講演	14	
20	金曜講演	15	中止解散
22	社会主義講習会	⑧	大杉講演。翌年以降、斉民社会合として続行
27	金曜講演	16	
1・3	金曜講演	17	新年会
10	金曜講演	18	
17	金曜講演	19	中止解散（金曜会屋上演説事件）
3・13	金曜講演	20	竹内善朔、森岡永治、坂本清馬出獄。中止解散
5・20	「大阪平民新聞」		号外（廃刊号）

＊「大阪平民新聞」および冨田昇「社会主義講習会と亜洲和親会」（「集刊 東洋学」64、1990年11月）所載の社会主義講習会開催記録を主に参照した。

所）においてエスペラント語講座を開き、ここに魯迅や宋教仁が参加していたという報告もある（宮本正男『大杉栄とエスペラント運動』〔黒色戦線社、一九八八年〕）。こうした努力と並行して、理論的接近の模索があったのである。当時の彼らを知る者は次のように証言している。「私と幸徳秋水、大杉栄、そして北輝次郎らとは頻繁な行き来があった。彼らは時々会合を開いたが、そこにはいつも私を参加させた。〔中略〕我々の話しの内容は、殆どがクロポトキンとバクーニンの学説についてであった」（南桂馨「山西での辛亥革命前後の回想」〔嵯峨隆他編訳『中国アナキズム運動の回想』総和社、一九九二年〕）。

また『近代中国の革命思想と日本――湯志鈞論文集』（兒野道子訳、日本経済評論社、一九八六年）によれば、中国とインドのグループが中心となって明治四十年四月頃に亜洲和親会が結成された。これは竹内善朔が「明治末期における中日革命運動の交流」（「中国研究」第五号、一九四八年九月）において証言しているものと一致するが、連帯の模索は日中にとどまらずインド・韓国・ベトナム・フィリピンの運動家へと広がりつつあったのである。冨田昇の指摘（表①下注）する通り、後に大杉は「事実と解釈」（「近代思想」大正四年十二月）に会規則の一部を引用し、それによれば「本会宗旨。在反抗帝国主義」とあって、反帝国主義戦線の形成がこの会の第一目標として明示されていた。

アジア革命運動の連帯を目指し亜洲和親会を結成した留日中国人グループは、孫文中心の中国同盟会の分派でもあった。中国同盟会の目標は「中国同盟会宣言」（一九〇五年八月〔『孫文選集』第三巻、社会思想社、一九八九年〕）によれば、第一に排満光復（清朝を打倒し中華を回復する）であり、民国樹立、地権平等である。これは孫文の基本的主張を反映したものであった（孫文「三民主義と中国の前途」〔『孫文選集』第二巻、社会思想社、一九八七年〕）。孫文を中心とする中国同盟会は、中国の危機的状況の克服を清朝打破に求めたのである。しかし亜洲和親会は、インドをはじめ、アジアの被抑圧的状況を帝国主義によるものと言明し、対外的連携を模索した。その規約にある目的は、帝国主義反対と民族独立であり、会の義務として相互扶助、他国に革命が行われた際の最大限の援助、を挙げている。この時期の中国同盟会は、日本政府の対中国政策の方針が支配にあるのか解放にあるのかを判断しかねており（小島晋治『アジアからみた日本』〔亜紀書房、一九七八年〕七九頁）、日本政府はその朝鮮支配によって西洋諸国のアジア支配と同列にあり、さらに「朝鮮の敵であるだけではない。同時に、インド、ベトナム、中国、フィリピンの共通の敵である」とした劉師培の主張などはけっして多数派などではなかった（劉師培「亜洲現勢論」〔『天義』第十一・十二合冊号、明治四十一年十一月三十日〕邦訳は小島前掲書）。反帝国主義戦線の模索と軌を一にして、明治四十年七月二十一日、在東京の日本人社会主義者有志は以下の決議を行っている。

> 吾人は朝鮮人民の自由、独立、自治の権利を尊重し之に対する帝国主義的政策は万国平民階級共通の利益に反対するものと認む、故に日本政府は朝鮮の独立を保証すべき言責に忠実ならんことを望む
>
> （「大阪平民新聞」第五号、明治四十年八月一日）

文中の「独立を保証すべき言責」とは、明治三十七年二月二十七日調印の日韓議定書第三条「大日本帝国政府ハ大韓帝国ノ独立及領土保全ヲ確実ニ保証スルコト」（海野福寿『韓国併合』〔岩波新書、一九九五年〕巻末資料参照）を指すだろう。実は第一回亜洲和親会には韓国からの出席者が無く、それは日本人が出席する場所には出ないというのが理由だったと竹内善朔は前掲「明治末期における中日革命運動の交流」に記してい

た。亜洲和親会の開催日が未詳の今、右の有志者決議との先後関係を確定できないが、こうしたアピールの背後には、帝国主義一般に対する連帯が各国の運動家の間にようやく兆しはじめた段階で、日本の社会主義者が唯一帝国主義国側から参加するという状況が存在していたのである。

しかし在東京有志者決議から三日後の七月二十四日、日本政府が韓国内政を完全に掌握する第三次日韓協約が調印された。日本の帝国主義は、着実に韓国併合に向けて進展していたのである。無政府主義的文献やエスペラント語は、こうした時期の歴史的過程の中で選択されていくのだが、この結合はわずかな期間しか続かなかった。守田有秋は明治四十一年一月十七日の金曜会屋上演説事件の現場に居合わせてからくも逮捕を免れた一人であるが、彼の「張継君は如何にして日本を遁れし乎」（『雄弁』大正五年十二月）によれば、張継もまた同夜逮捕を免れ、谷思慎という同志の入院していた築地の山田病院に一旦身を潜め、守田を手紙で呼んで今後について相談した上で、日本を脱出したという。この事件に続く赤旗事件、大逆事件によって、「近代思想」創刊時、もはやこのようなネットワークの回復は不可能に近い状態で、国内の活動さえ各地で寸断されたままであった。第一巻第五号（大正二年二月）の「大久保より」（寒）や、第六号（三月）の「大久保より」（栄）には、大逆事件によって諫早監獄にある同志の家族を見舞ったことや、刑死した菅野須賀らの墓を訪う散歩をしたこと（墓には嘲罵の言葉が刻まれていた）、秋田監獄の坂本清馬らと面会したことなどが記されている。この時期、大杉らの脳裏には刑死した、あるいはなお獄中にある同志や、その残された家族たちのさまざまな声が響いていたはずである。大逆事件は天皇の名を利用しての社会主義弾圧であったが、その脅迫的暴力性は、天皇の死を利用して哀悼の「感情」を主体的に発露するよう要請する道徳的言説を背後から支えている。この暴力性の二つの出現の仕方は、「大阪平民新聞」と「近代思想」が中心において批判せねばならなかったものの性格を端的に表している。そこで新たな試みとして開かれたのが近代思想社小集であった。

これは「近代思想」同人や友人たちに加え、文学者を数名外部から迎えることに第一の目的があり、議論というよりも会食と雑談の集会であった（表②）。近代思想社同人と思想的立場の大きく異なる人物も含まれており、雑談の程度もさまざまである。これがかつての金曜講演会などと大きく異なるのは、大衆や地方青年へのアピールではなく、文壇生活を送る文学者の間につながりを持つことを目標としていた点である。

たとえば第三回の小集には島村抱月と相馬御風が招かれている。大杉らが「早稲田文学」を文壇介入の足がかりとしたのは、大杉自身も一時身を置いていた早稲田が、安成貞雄や白柳秀湖らを通して近しい存在であったばかりでなく、自然主義文学論が実行と芸術問題の前で停滞していた状況が介在してのことである。

「近代思想」大正二年四月の「社会と文芸」（栄）に、島村抱月と相馬御風を小集に招いた記事が掲げられている。この小集での抱月の態度は、「抱月氏は、文芸の第一義として、所謂静かなる観照と美のエクスタシーとを重んじてゐるらしい」との感想を抱かせるものであった。これを受けて、「近代思想」六月号の「征服と事実」に「吾々をして徒に恍惚たらしめる、静的美は、もはや吾々とは没交渉である」として「憎悪美と反逆美との創造的文芸」が求められることになる。そもそも「観照」は自然主義文学理論において島村抱月が用いた言葉で、実行と観照は異なる概念であったが、大杉は「実行に伴ふ観照がある」とその意味の転化を試みていたのである。

表②　近代思想社小集その他の集会（大正2年）

月・日	集会場所	参加者（判明分）
1・4	①メーゾン鴻の巣（鎧橋）	寄稿家13名〔土岐哀果・安成貞雄・和気律次郎・伊庭孝・上司小剣・荒畑寒村・大杉栄など〕・馬場孤蝶・生田長江
2・9	②メーゾン鴻の巣	寄書家5名・社員2名・内田魯庵・岩野泡鳴
3・22	③メーゾン鴻の巣	島村抱月・相馬御風
4・16	日比谷公園	平民会。堺利彦・野沢重吉ら40名
4・19	④メーゾン鴻の巣	久津見蕨村・平出修・片山潜・和気律次郎・安成貞雄・安成二郎・堺利彦・佐藤緑葉・仲木貞一・荒畑寒村・小原慎三・大杉栄
6・8	⑤メーゾン鴻の巣	馬場孤蝶・片山潜・上山草人・伊庭孝・久津見蕨村・堺利彦・安成貞雄・安成二郎・和気律次郎・上司小剣・土岐哀果・高畠素之・小原慎三・江渡幸三郎・久板卯之助・荒畑寒村・大杉栄
7・□	（神田）	センヂカリスム研究会〔月二回〕開始
7・12	⑥メーゾン鴻の巣（麹町隼町）	長谷川天渓・片山潜・伊庭孝・久津見蕨村・堺利彦・安成貞雄・安成二郎・和気律次郎・土岐哀果・高畠素之・小原慎三・島田一郎・横田淙次郎・荒畑寒村・大杉栄
9・20	豊生軒（神田）	茶話会。30名
10・11	⑦富嘉川（京橋）	安成兄弟・佐藤・和気・堺・片山・久津見・小原・徳永保之助・荒畑・大杉・原田譲二・柴田柴庵・赤堀建吉・鈴木長次郎

三　民衆芸術論への方向

大杉栄は後に「新しき世界の為めの新しき芸術」（『早稲田文学』大正六年十月）で民衆芸術論争に加わっている。そこで大杉は民衆芸術論が「民衆にとつても、亦芸術にとつても、死ぬか生きるかの大問題である」と述べているが、「死ぬか生きるか」とは「芸術」と「民衆」の存在の根元にかかわる問題であり、またその両者が不可分の問題であるという認識を示している。大杉は自身の翻訳『民衆芸術論』（阿蘭陀書房、大正六年六月）から、ロマン・ロランが紹介した次の挿話を引用している。それはある労働者が「一切の憎悪は悪である」と説く講演者に対し、「憎悪は善である。憎悪は正義である。被圧制者をして圧制者に反抗して起たしめるのは此の憎悪である」と言ったという話である。大杉はこの引用の直前に、「憎悪」に関する自身の二つの文章、「征服の事実」（『近代思想』大正二年六月）と「生の拡充」（同、七月）を参照している。

前者では征服階級と被征服階級の間の不平等の維持手段――「組織的暴力と瞞着」の手段として、政治から文芸まで「一切の社会的諸制度」とこれに奉仕する「智識者」の存在が指摘されている。文芸が「征服の事実」を見ない時、それは「日常生活にまで圧迫して来る」事実への諦念ないし忘却として機能する。「生の拡充」はこれを受け、「征服の事実」への憎悪と反逆にこそ美があり、真の「活動」があると述べる。これらを指して「僕の此の芸術論は明白な民衆芸術論であつたのである」というのが「新しき世界の為めの新しき芸術」の基本姿勢であった。

「近代思想」創刊号（大正元年十月）の大杉の巻頭論文「本能と創造」は坪内逍遥のイプセン論批判であったが、それは「芸術」領域における「道学者」的指導力としての逍遥への注目であった。逍遥は『所謂新シイ女』（精美堂、明治四十五年四月）でノラに心情的理解を示しつつ、一

家の妻たる社会的自覚を求めており、いわば協調主義的態度で社会的規範の遵守を説いていた。これもまた「近代思想」が、芸術領域における活動を必然へと導く要因の一つであったといえる。一時的退避や運動の準備という側面を越え、「芸術」という名のもとに機能・進行している「道徳」的呼びかけ――日常生活において社会的規範を個人の「道徳」へと内面化する言説――への対応が、緊急の課題として浮上したのである。

大杉がいち早くこの事態を意識したことは、前出の巻頭言「法律と道徳」（大正元年十二月）や、同じく巻頭言「道徳の創造」（大正二年二月）、「社会か監獄か」（大正二年四月）、「鎖工場」（大正二年九月）などで文字通り社会の「監獄」化、身体の「鎖工場」化として表現されることになる。制度や組織は単に外在するのではなく自身の意識において維持されていて、他者への「恐れ」や自身の「胃の腑」と結びついて構造的に機能しているという認識である。この批判の線上に書かれた「征服の事実」で「組織的瞞着」手段として問題化されていた従来の文芸には、特に自然主義論が想定されていた。なぜならその主張に従って「実行」と「芸術」との切断が「静的美」を表現するものならば、それは事実の諦念と忘却を意味する「組織的瞞着」でしかないからだ。事実を顕在化し、意識化するような「反逆」こそが、「芸術」と呼ばれる。

> 実行とは生の直接の活動である。〔中略〕多年の観察と思索とから、生の最も有効なる活動であると信じた実行である。実行の前後は勿論、その最中と雖も、猶当面の事件の背景が十分に頭に映じてゐる実行である。実行に伴ふ観照がある。観照に伴ふ恍惚がある。観照に伴ふ熱情がある。そしてこの熱情は更に新しき実行を呼ぶ。そこにはもう単一な主観も、単一な客観もない。主観と客観が合致する。これがレヴオリユシヨナリーとしての僕の法悦の境である。芸術の境である。（「生の拡充」）

「実行」にこそ「芸術」があり、観照が目指す人生の全的把握ないし主客の合一は、「反逆」によってもたらされるというのである。そもそも民衆芸術論「新しき世界の為めの新しき芸術」は、本間久雄の「民衆芸術の意義及び価値」（「早稲田文学」大正五年八月）への批判であった。本間が芸術鑑賞が、その更新的効果によって民衆の教化、労働問題の部分的解決に役立つと主張していたことに対し、大杉は、「芸術」によってこそ現実認識から実行へと進む感情を民衆みずから得るものでなければならないとして、「憎悪」によってそれを代表した。この民衆芸術論への介入は、「近代思想」以来の芸術・道徳批判の延長にあったのである。

「近代思想」期の大杉の批評は、後の民衆芸術論への接続という観点において、より明確になる。「生の創造」（「近代思想」大正三年一月）には「理想は常に其の運動と伴ひ、其の運動と共に進んで行く。理想が運動の前方にあるのではない。運動其者の中に在るのだ。運動其者の中に其の型を刻んで行くのだ」とある。「運動」の一々の反映が、娯楽・活動・思想といった具体的な「生活」の過程を経て、民衆芸術を規定する。「運動」の具体的現実が「生活」であり、その生活様式こそが民衆芸術であるという意味で、大杉は「新しき世界の為めの新しき芸術」の最後を、「実生活論で終らせたい」と結んでいたのである。これは主体を超越的立場に置く芸術から、現実の認識や生活実践の過程に身を置いた主体の側に芸術を奪還する試み（その理論化）である。

本間久雄はすでに大正二年四月の「森田草平氏へ」（「早稲田文学」）において、「鑑賞者としての私に対して芸術は実に動かし難い一個の人生

です」と述べ、芸術鑑賞を自然主義的な人生の「観照」に匹敵するものと考えていた。これは、芸術の生産者側に身を置いて言説を行使する者が、その芸術の価値の万能性を主張するに等しく、自己の立場を超越的な位置に置くものであった。本間の民衆芸術論も、最初安成貞雄によってその立場性を問われることになる。みずからを超越的立場に置く「鑑賞」とは、坪内逍遥が「趣味」（「趣味」明治三十九年六月）において、「テースト」（taste）は「趣味性」とも「鑑賞力」とも訳せると説明した中で、これを「人が物のよしあしを判断する」ための能力であり「理知」とは異なって「感化活動の力」を持つと述べているものと同じである。明治四十四年頃には、「教化の目的と文芸協会」（『教化と演劇』〔尚文館、大正四年一月〕所収。講演）の中で、文芸協会は「国民の趣味性の向上」という広義の「教化」を与えるもので、狭義の「教化」は新思想の鼓吹に傾き、革命思想に至る危険があるが、広義のそれは生の自覚と拡充を「社会の為」へと高める有効性を持つと述べていた。「趣味性」や「鑑賞力」は普遍的生得的能力であるかのように語られ、その錬磨と行使は、「人間」や「国民」への自己同一化を約束するものとなる。こうした超越的「鑑賞」論の上に立つ限り、民衆芸術論は、芸術の享受者として「民衆」を規定し、その「感情」を構造化することになる。

民衆芸術論で参照を求めた「征服の事実」や「生の拡充」における「道徳」批判の視点が、あらかじめこうした鑑賞論・教化論的民衆芸術論への批判を含みこんでいたという大杉の主張は、たとえば「征服の事実」での批判が、単に現行組織・制度と「民衆」との支配関係以上に、対象を構造化する言説のメカニズムを焦点化していた点を指している。被征服者の中からある知識・技能をもった一部が特権的に征服者につかえることで権力構造を再生産するという「組織的瞞着」の概念は、まさに乃木殉死にまつわる言説に見られたごとく、現実の権力構造において知識人が担ってしまっていた機能を性格づけるものであった。「近代思想」での大杉栄を中心とする文壇介入は、以上見てきたように、大逆事件以後の道徳的要請ないし「感情」の編成の中で、新たな運動の必然性として思考され、選択され、行動されたのである。

（本学大学院博士後期課程）